

繪沼尻絰一郎編輯  
本  
西  
南  
太  
平  
記

二  
号  
下

10

15

20

25

A434  
2

西南太平記二編卷之下

東京 沼尻絳一郎編輯

逆將村田兄弟西郷小平討死

第四回

新政大総督の標札と建る事

頑固黨の神風連も未だ封建の舊夢が覚めて維  
 新の皇化と戴く残悦をば一と叛跡顕然たる鹿兒  
 島縣暴徒入へ與せしみの熊本士族の内三百餘名  
 の兇徒加陽嶺の暴士族みこ賊軍の魁をとるさんと

西南太平記

二編下二

48-7785

の支るりオホ既サデ鹿兒嶋ウヰー激徒マゲキの過るスグ二十四日ニジュウヨウニチ植木駅ウヰキエキ  
の戦いくさふ吉田ヨシダ陸軍少佐リクジュンショウサが山鹿ヤマカを襲撃ウラゲキし山上ヤマノウヘふ分ぶん  
登りのぼ奮激ふんげきありて賊軍ぞくぐんと砲戦ぱうせん数合すうがふおよび暫時勝ざんぷりやう  
敗分まひこつちがと一ひとが賊軍横合ぞくぐんよこあひより無二無三むにむさんふ撃立うちこて  
かバ吉田少佐ヨシダショウサの必死ひつし又防戦ぼうせん及び賊兵ぞくへいと大半爰おほんそ  
ふ討うちとり一ひとが遂ついに賊ぞくの流れ弾なみか九こふあとり討死うちどしせ  
又また廿六日午前にじゅうろくにちごぜん高瀬川たかせがわ向むかふと戦争せんそうありしが終つひふ  
賊軍ぞくぐんと撃退うちりぞけたれども何分手なにぶんてびろ廣ひろの場所ばしよあるとバ

とと長崎表ながさきへ出兵しゅつべいの依頼いらいありたるふ付直つきちやう様兵やまへいを  
練出れんしゅつしたりと翌あした二十七日にじゅうしちにち賊軍ぞくぐんの熊木くまぎの城下じやうげふ道みち  
りその勢いきさひ盛さかんふして大小砲おほせうやうと連発れんぱつし短兵急たんへいきゅうふ  
攻せうたて既すでに城壁間近じやうへきまぢかに進撃しんげきしたる折をりこそあられ  
忽然こうぜんとして一聲ひとこゑの地電火ぢでんかと発はつし瞬間しゅんかんふ賊徒ぞくし四五  
十名じゅうなと斃めしたるを見て賊軍ぞくぐんの皆みな這々の體ていみて散さん  
乱らんし銃器じゆうきと捨て遁去にげり一ひと又同日またごふにち賊軍ぞくぐんの羽間川はまがわ  
ふ向むかて進撃しんげきす官軍くわんぐんの川がわの土手とてに寄りて之これと戦いくさひ

たりけるが賊軍の川上より追々操り込を来り戦  
闘暫時射撃せらるる高瀬口の勝利を得て参謀三  
好少将進撃をせしが手疵を受け引揚げたりと  
尤も劇く官軍より炮発せし賊兵益激戦及ぶ  
官軍必死ふ烈戦あり死傷二十六人賊軍死斃九十  
二人賊将村田新八の三好少将を討捕んと一人ふ  
て斬入り官軍の為ふ胸板へ重傷と追ひ引退て  
遂ふ戦死および一將と失ひて賊兵英氣と挫き

たる同日午后四時ごろ賊兵漸次ふ敗走せり又山  
鹿口ふ在り賊兵が高瀬羽間へ進撃し先途の  
耻辱とすうがんとて扱こそ兵と轉ト激戦るさんと  
頻りふ羽間の川流ひよ進を官軍の横備へと打た  
るふ因て官軍之れと奮戦し新手ふて進軍し  
遂に川向ふへ逐ひ返したるふ賊の再び山ふ扱  
て大ふ戦ひ官軍の一先船捕村へ引揚げたり又  
夜ふ入で賊軍高瀬ふ来りたるふ依て官軍より



高瀬口み  
進撃して  
村田新八  
討死す

跡比之虫

五月六日

二編下二四

も進撃しんげきしたるに賊ぞくの寺田てらだまが引退ひきりぞきたり又同  
 日げきせん激戦そんろうの双方うちよてふみとも討死うちよてふみ手負てふみ数十人すうじゆあり互たがひ不  
 奮ふんげん撃げき手突てつせん戦せんしたるに實じつに驚おどろくべきなとるありと此  
 戦せんひみ西郷隆盛さいごうりゆうせいの副将ふくしょう村田新八むらたにんぱち討死うちよてふみせし  
 官軍くわんぐんの奮戦ふんげん四方しやうほうより進撃しんげきして村田むらたを討うちとらんと  
 攻入せまひりしに遂つひに村田むらたも数ヶ處すうじよの深手ふかてを負おい討死うちよてふみ  
 せり賊軍ぞくぐん敗走ばいそうとるに死骸しがいを打捨うちすてて逃去にげりしに遂つひ  
 不ぞくぐん賊軍ふ踏ふと止とまらざるに多人数たうじんず植木うゑき馱かふて討死うちよてふみせら

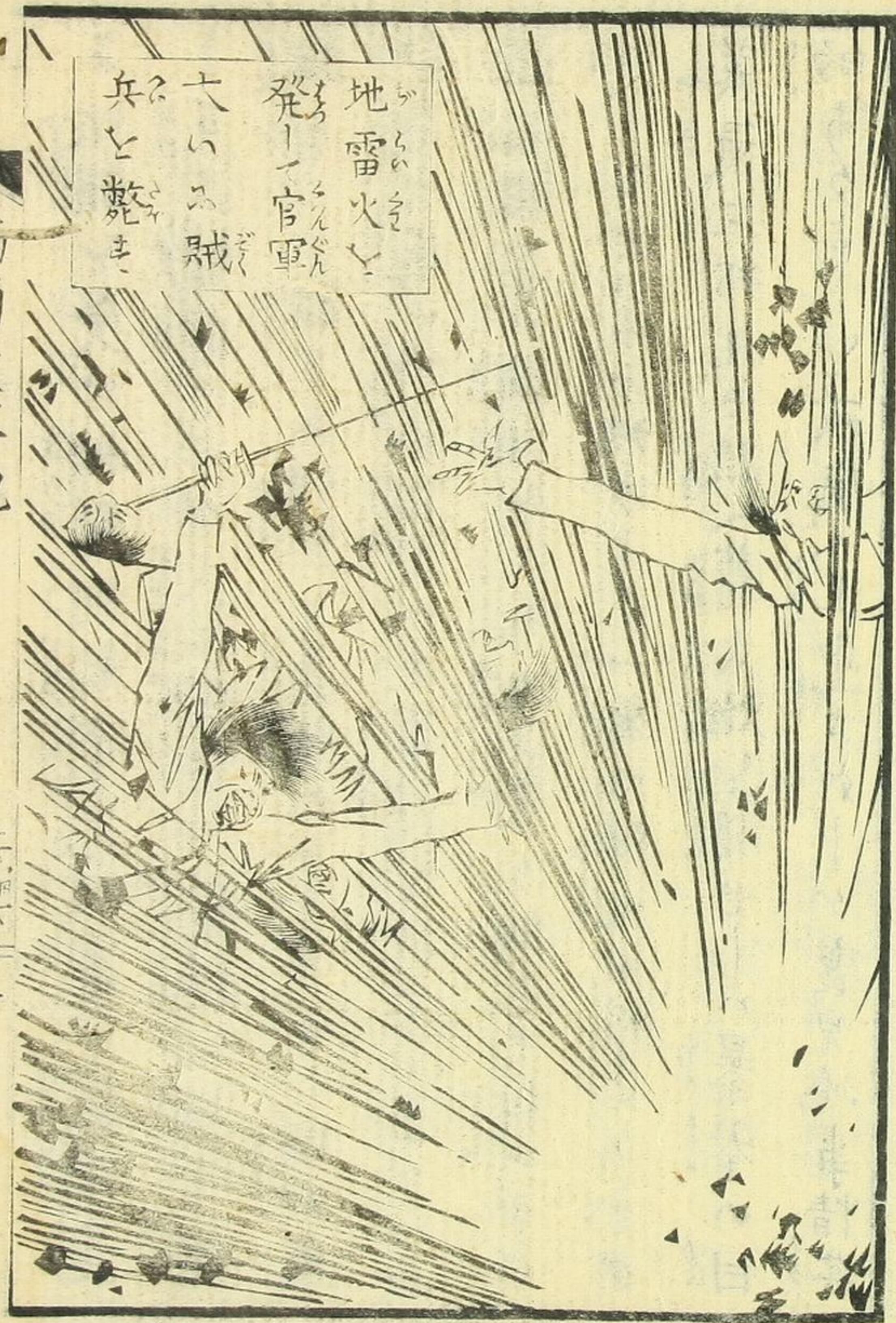
れける又同時また同時の戦せんひに熊本城くまもとじやうの鎮臺兵ちんたいへいも應援おうえん  
 せんとしたる途中とちゆう賊徒間道ぞくとくまんだうより突然とつぜんとして進撃しんげき  
 たきども官軍くわんぐんの少すくしも屈くせず大おほふ之これと奮撃ふんげき手突てつせん戦せん  
 したる勢せいひ實じつに恐れおそれべきなとるあり倭やまとの賊地ぞくちも  
 あり迎陽むよう舞鶴まゐづる野茂ののの三艘さんさうと海軍かいぐんも賊軍ぞくぐん  
 へ進撃しんげきふよび賊船ぞくせん三艘さんさうとも忽地とつぜん奮取ふんげきり直ちちかに  
 野茂ののの焼捨やきすてて舞鶴まゐづるの器械きやくを外そとに迎陽むようの使用しよせ  
 らまたり此迎陽このむよう丸まるを龍驤艦りゆうしやうかんのためために奪うばはれ

山内太平記

二編下

たるが持の當日の十二門そのろり弾薬糧食等  
 と八代へ陸揚げるゝ帰る途中ふして肥前の  
 国天草の東日奈久の沖合にて奪ひ取られしを  
 り然れども官軍の此船を以て鳳翔艦と共ふ八  
 代海を固め金華丸と難波丸の茂木洋を固め福  
 原陸軍大佐の當分の下の関ふ逗留せられ山縣陸  
 軍卿の参軍に任せられ福岡へ去る二十四日ふ  
 着せられ鹿兒島の景況を窺ひりりしが又河

村海軍大輔も参軍に任せられ同二十四日朝博多  
 へ着せられ至急下関へ廻船し下の関の総  
 督府を置られ神戸へ臨事海軍事務局をたつと  
 征討の事務を取り扱つるべき布達あり又大山  
 縣令の鹿兒島の人ふり八百石の賞典米を持て  
 家禄をせし辰年事件ふの参謀とるのり奥  
 羽へ進み数度苦戦および古今の豪傑たり今  
 田の沸騰ふ鎮撫せんと盡力して後ふ西郷氏



地雷火  
 官軍  
 大い  
 兵と

西南大平言

二編下



西南大平言

五



不<sup>つ</sup>依頼<sup>の</sup>と受け桐野利秋等と時事と討論され  
 一<sup>た</sup>互<sup>た</sup>ふ説<sup>を</sup>破<sup>す</sup>せしが大山綱良の逆徒と竊<sup>ひそ</sup>る<sup>ま</sup>ふ周  
 旋<sup>せ</sup>る<sup>ま</sup>て縣<sup>けん</sup>下<sup>か</sup>ふ他<sup>た</sup>出<sup>で</sup>と差<sup>さ</sup>留<sup>り</sup>たりしがその頃<sup>ころ</sup>旧<sup>きう</sup>鹿  
 兒<sup>こ</sup>島<sup>しま</sup>大<sup>だい</sup>属<sup>じゆく</sup>の洪<sup>こう</sup>谷<sup>こく</sup>国<sup>こく</sup>安<sup>あん</sup>へも事情<sup>じじやう</sup>と託<sup>たく</sup>せしとりのいふ  
 洪<sup>こう</sup>谷<sup>こく</sup>國<sup>こく</sup>安<sup>あん</sup>の彼<sup>かの</sup>地<sup>ち</sup>と三<sup>さん</sup>邦<sup>ぱう</sup>丸<sup>まる</sup>を乗<sup>の</sup>り組<sup>ぐ</sup>とて神<sup>かみ</sup>戸<sup>と</sup>まふ  
 走<sup>を</sup>しらせけりが地方<sup>ちほう</sup>より一<sup>いつ</sup>発<sup>はつ</sup>の弾<sup>だま</sup>丸<sup>まる</sup>が何<sup>なに</sup>と<sup>り</sup>しが  
 蒸<sup>じやう</sup>氣<sup>き</sup>三<sup>さん</sup>邦<sup>ぱう</sup>丸<sup>まる</sup>の脇<sup>わき</sup>へ剪<sup>せん</sup>大<sup>だい</sup>炮<sup>ぱう</sup>と発<sup>はつ</sup>せしは暴<sup>ぼう</sup>拳<sup>けん</sup>の目<sup>め</sup>  
 的<sup>てき</sup>のありよりと政府<sup>せいふ</sup>へ上<sup>じやう</sup>申<sup>しん</sup>されしが鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>嶋<sup>じま</sup>事情<sup>じじやう</sup>甚<sup>しん</sup>

と總<sup>そう</sup>つなはる<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>大山<sup>おんやま</sup>氏<sup>し</sup>も神<sup>かみ</sup>戸<sup>と</sup>に<sup>り</sup>出張<sup>しやうちやう</sup>あり悉<sup>しつ</sup>く西<sup>さい</sup>  
 京<sup>けい</sup>行<sup>ぎやう</sup>在所<sup>しやうじやう</sup>へ上<sup>じやう</sup>申<sup>しん</sup>せしが大山<sup>おんやま</sup>綱<sup>なう</sup>良<sup>らう</sup>の已<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>の罪<sup>つみ</sup>と説<sup>せつ</sup>  
 れて去<sup>さ</sup>る<sup>ま</sup>二月<sup>にがつ</sup>二十<sup>にじゅう</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>西<sup>さい</sup>京<sup>けい</sup>行<sup>ぎやう</sup>在所<sup>しやうじやう</sup>より達<sup>たつ</sup>し鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>  
 島<sup>しま</sup>縣<sup>けん</sup>令<sup>れい</sup>大山<sup>おんやま</sup>綱<sup>なう</sup>良<sup>らう</sup>官<sup>くわん</sup>位<sup>い</sup>と剝<sup>はく</sup>奪<sup>だつ</sup>せられたりと去<sup>さ</sup>る<sup>ま</sup>  
 廿<sup>にじゅう</sup>五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>行<sup>ぎやう</sup>在所<sup>しやうじやう</sup>第<sup>だい</sup>五<sup>ご</sup>号<sup>ごう</sup>と以<sup>もつ</sup>て使<sup>し</sup>府<sup>ふ</sup>縣<sup>けん</sup>へ布<sup>ふ</sup>達<sup>たつ</sup>ふ<sup>ま</sup>左<sup>さ</sup>  
 之<sup>の</sup>通<sup>とほ</sup>り  
 今<sup>いま</sup>般<sup>ぱん</sup>鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>島<sup>しま</sup>縣<sup>けん</sup>下<sup>か</sup>逆<sup>ぎやく</sup>徒<sup>と</sup>征<sup>せい</sup>討<sup>たう</sup>被<sup>ひ</sup>仰<sup>おほ</sup>出<sup>で</sup>候<sup>こう</sup>御<sup>ご</sup>趣<sup>すい</sup>  
 意<sup>い</sup>ハ本年<sup>ねん</sup>一<sup>いつ</sup>月<sup>げつ</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>夜<sup>よ</sup>陸<sup>りく</sup>軍<sup>ぐん</sup>省<sup>しやう</sup>所<sup>しよ</sup>属<sup>じゆく</sup>鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>

島縣下ノ彈藥庫へ逆徒及人数不意ニ押  
 入リ貯蓄ノ小銃彈藥多數奪取猶又二  
 月二日三日ノ兩夜同所へ乱入監護ノ官吏  
 ナ暴然辱シ銃器彈藥ヲ始メ倉庫ニアル  
 所ノ物品悉皆掠奪致シ且海軍省所管  
 同所造船所ヲモ奪取リ標札ヲ掲ケ改メ  
 其上同月八日郵便船太平丸琉球ヨリ歸  
 航鹿兒島港へ碇泊候チ差押へ乗組官

ヲ抑留致シ候ノミナラズ多衆嘯聚兵器ヲ  
 弄シ各所ニ徘徊スル等不容易形状ニ相聞  
 へ候ニ付現状取糺ノ為メ河村海軍大輔林  
 内務少捕ヲ高雄丸ニ為乗組鹿兒島表へ被  
 差遣兩人着港ノ上縣官へ使トシテ属官二  
 員上陸セシメ候所逆徒等忽チ右二員ヲ拘  
 留シ剩へ銃器ヲ携へ小船數艘ニテ該船へ  
 迫リ来リ直ニ小銃ニ裝彈該船へ可打掛形

状ニ付一旦その場ヲ出艦近傍海岸ニ投録  
シ大山縣令へ面會之上事情取糺シ候所  
逆徒等前文彈藥掠奪暴拳、後俄ニ當  
時歸縣致シ居候警察官吏数名ヲ捕縛糺  
問ノ上口供ヲ要シ妄説ヲ以テ悖乱ノ名ヲ  
飾リ人心ヲ煽動シ兇徒ヲ嘯聚スル等不軌  
ノ形跡判然タルヲ見認メ兩入直千ニ歸京  
シ上奏ニ及ビ候ニ付猶取糺シノ上至當ノ

御所今ニ可被及 叡慮ニ候所遂ニ去  
ル十八日西郷隆盛桐野利秋篠原國幹等  
政府へ尋問ヲ名トシ逆徒ヲ引率シ兵營  
ヲ携帶セシメ熊本縣下へ乱入候段國憲  
ヲ蔑如ヲ治安ヲ妨害スルノ拳動彌叛  
跡顯然ニ付深ク御宸怒被為在邦典ヲ奉行逆  
徒征討被仰出候次第ニ候條厚々御趣意ヲ奉體  
此際訛言流説ニ疑惑不致様管下人民へ懇諭取

締方一層注意可致此音更ニ相達候事

太政大臣三條實美

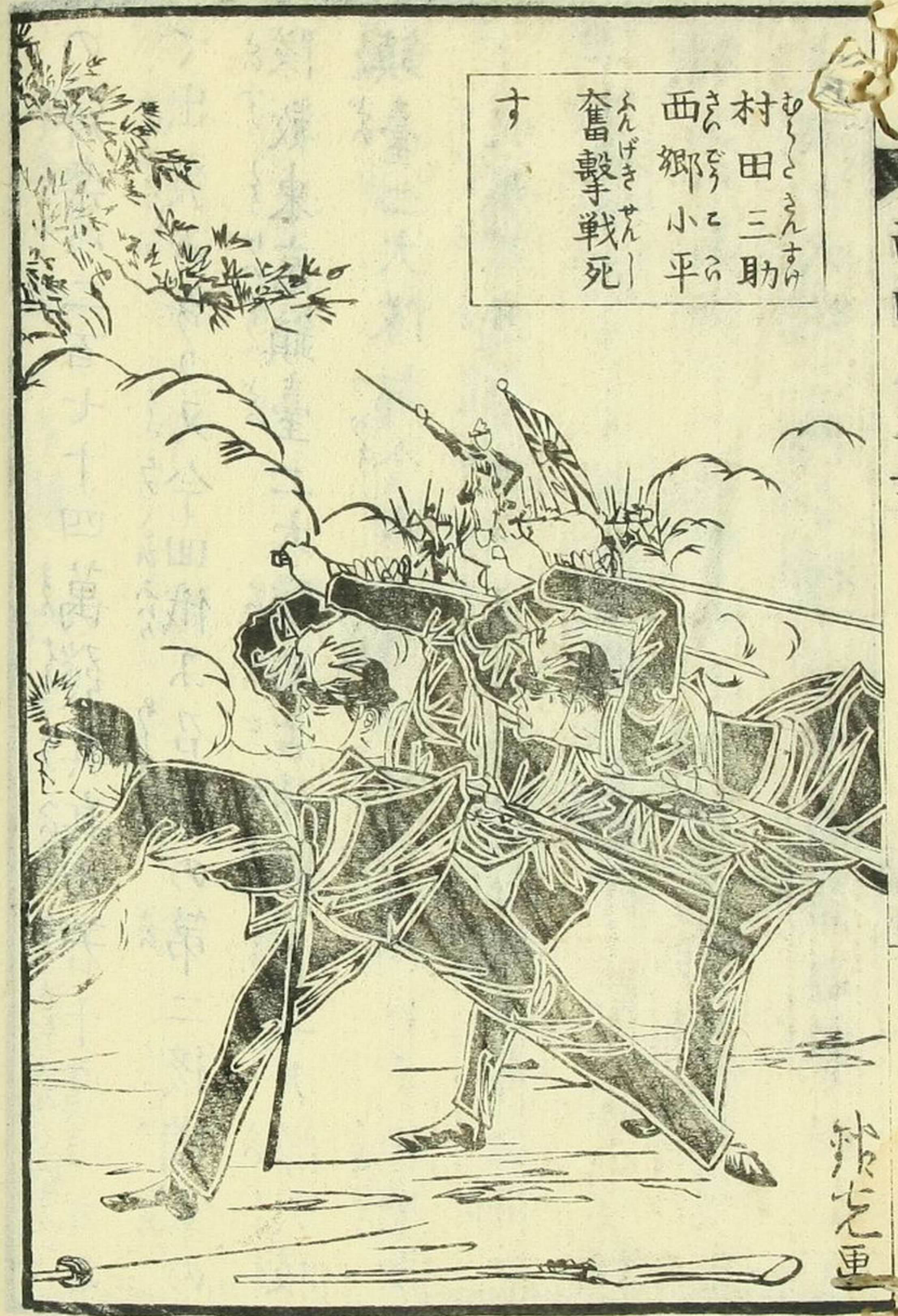
鹿兒島縣下の兇徒追々暴行ニ付この不ど  
より上州白井峠多々バニ相州箱根右ニケ  
處へ番兵と差置りれ又と三月一日あり東  
京より砲兵一大隊同日小東京鎮臺の内一中  
隊皆る西海へ向け出帆又なり同日あり  
てハ砲兵本廠より積之込ニ一トスナイドル

の弾薬ハ二百七十四萬發其兵士若干廣嶋丸み  
て出發あり又今回俄ニ召集の第二後備軍の  
隊數東京鎮臺二大隊名古屋鎮臺二大隊大坂  
鎮臺二大隊都合六大隊ハ西海へ向けと出發る  
一又鹿兒島熊本戦争の事情と按ずるみ去る  
二十六日二十七日の兩日戦ひ劇しく二十六日の戦  
闘あり高瀬口へ進撃あり官軍方大勝利臺場と  
兼取り大炮二門分捕して官軍益進撃同二十



石月三平

編下



村田三助  
 西郷小平  
 奮撃戦死  
 す

西郷小平言

於七画

七日高瀬木ノ葉と取り高瀬驛ハ子キと少しく放  
 火みして焼くもつゝ翌二十八日午前六時ごろ稲田  
 村渡し場の番兵へ賊より砲発したりけり官軍  
 より大砲三十發と打ちて賊四十餘人と斃たり  
 同日午後三時頃より高瀬口ふいそ劇戦ありて  
 尤も烈く官軍も必死の勇と奮ひ進撃をせし  
 敵軍の逆將篠原國幹ハ一大隊と率ひて熊本  
 安政橋向より引返し再び高瀬口へ頻ふ進んで

戦ひしガその勢ひ焔や強うりけん此手も寄たる  
 村田三介西郷小平ハ官軍の渦巻中へ斬入りて  
 矢庭ふ進と奮戦をせし敬部數名を援連  
 れ戦ひしに村田西郷兩弟ハ無二無三ふ斬り入り  
 遂に敬部數名のためふ討とられたり此奮戦ハ  
 敬部十餘名討死あり賊兵百有餘人討れ死  
 骸の山と積と血流溢れく恰も瀧の如く官軍の参  
 野津三好を烈しく令して一人も餘を洩ら

するに 継げやし 敵方小伏勢 何らんも 計りがとく  
 として 野津陸軍少将士卒 指揮をなせし 賊  
 軍第一大隊の 総大将 篠原國幹ハ 参謀と討と  
 らんと 奮撃する 下知と傳へて 乱る中 我に  
 續けと進と戦ふ 又乱軍とあり 双方奮激し  
 篠原大将も 手疵と受け 戟と舞して 突て 蒐れを  
 野津氏の 大隊 攻立てらる 深手と負く 士  
 卒纏め 四時過ぎ 引揚げたり といふ 官軍大

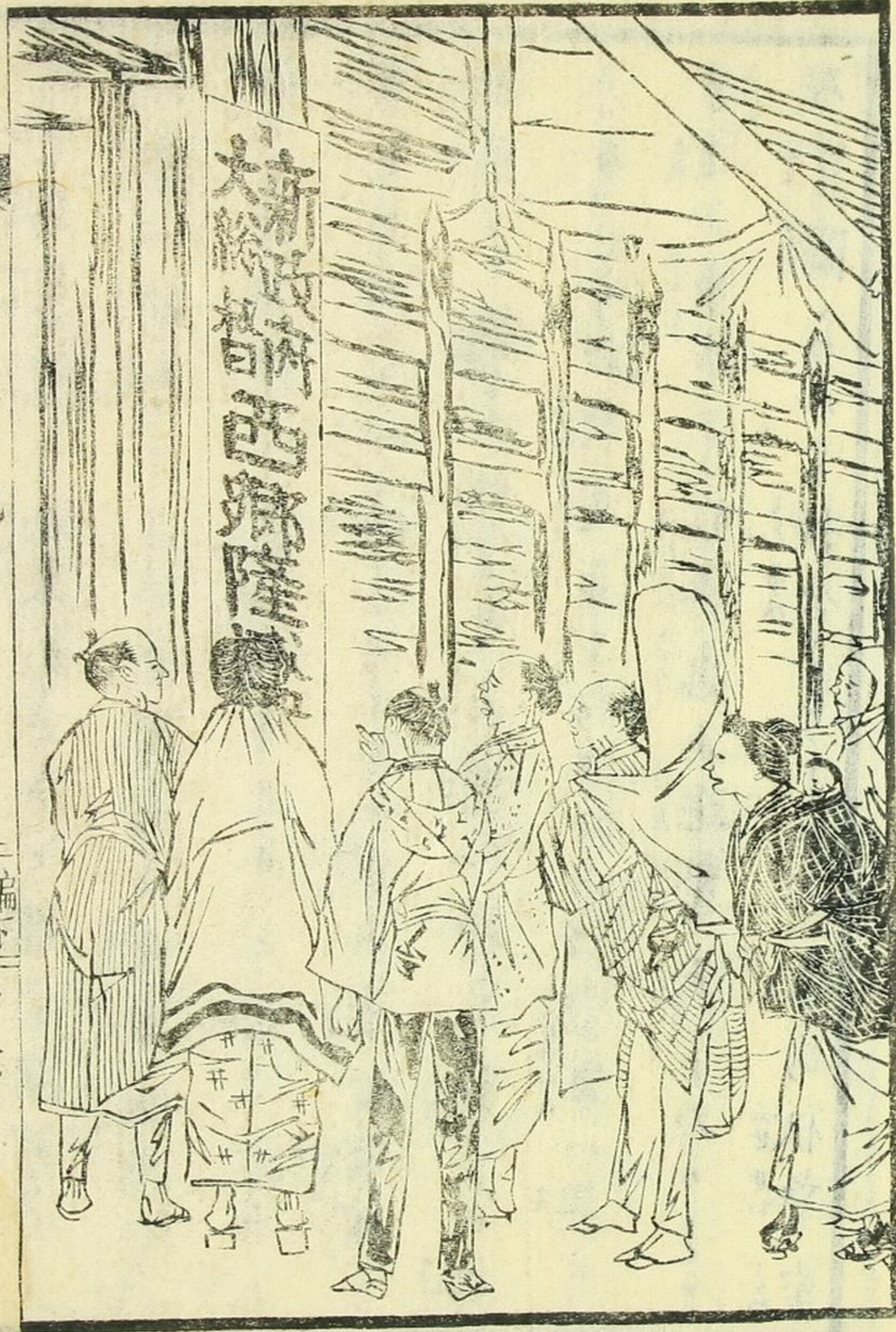
奉一 又翌立三月一日 南の関と 植木と 二手ふる  
 つと 進撃手を 西郷隆盛ハ 川尻町と 本陣とる  
 一 恰も 城小偽る 景況ふと 新政大總督 征討大  
 元帥 正三位 陸軍大将 西郷隆盛 本陣」と 大書した  
 る 標札と 掲げ 其他 大佐 某少佐 某など 銘々 宿  
 所へ 立込 小建 置き 鹿兒島 藩 新政府 大總督 稱  
 号して 宿所々々の 出張所へも 掲げし 自分ノ  
 僭号ふる べけきと 朝廷より 叙任 正三位 陸軍大

將の官位ハ既すハ剝奪はくたつさまたる小勇こゆうままく見せら  
けーハ

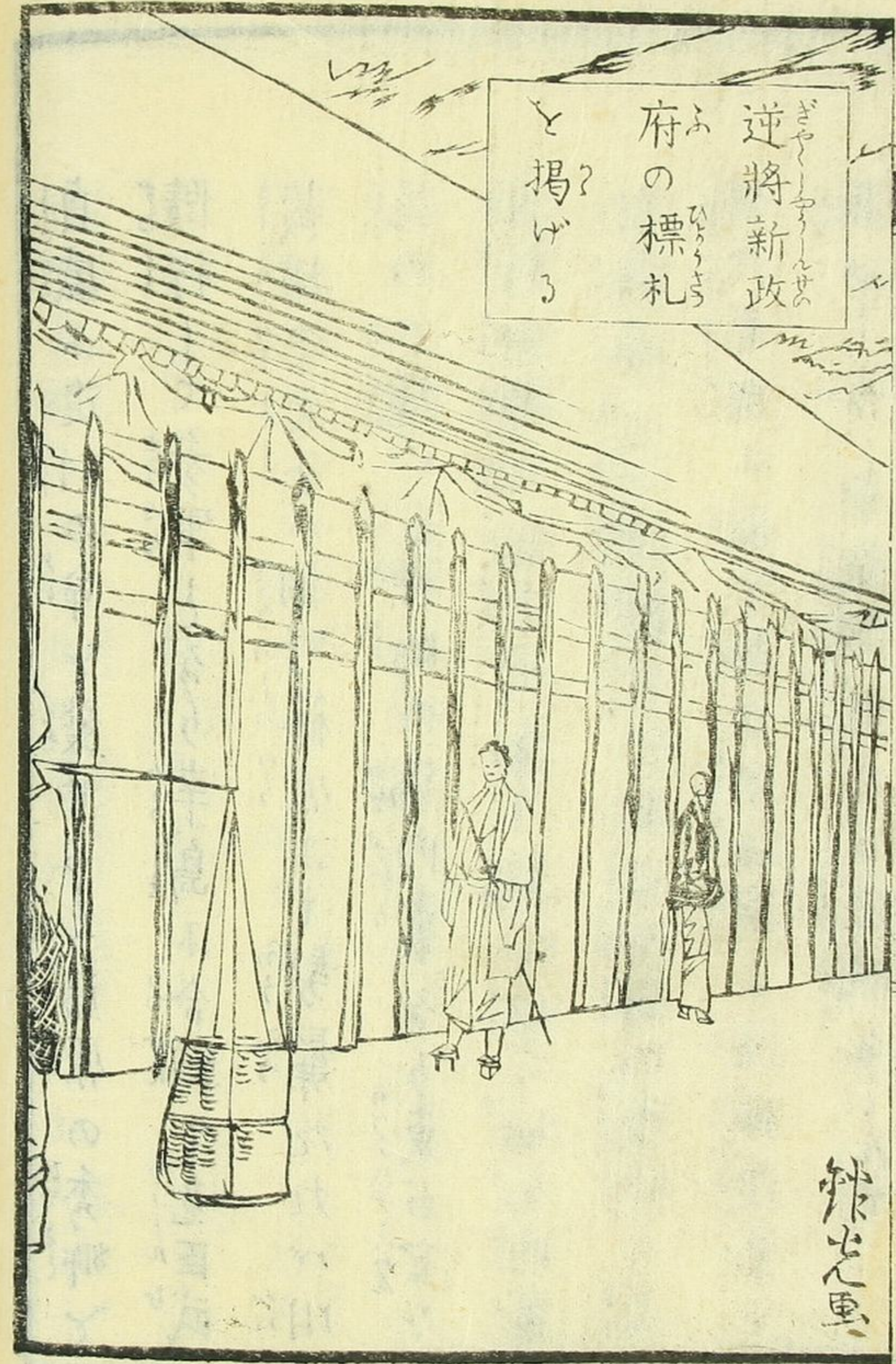
編者云く西郷隆盛自ら新政府大総督とい  
則ち天慶三年ハ下総の國猿島石井の郷ハ  
偽せ内裏と建たて平の將門親王新帝と仰せ  
たる逆將の平親王たり將門属下と集り謀叛  
の評議してその説端叛覆るさんと一決して  
將門東國ハ威と振ふるハ暴逆甚おそろしけれハ上平太

貞盛ハ追討の命と發せらると藤原の秀郷と  
隨行して參軍とあり辛島ハ合戦す老臣武  
藏權守父子ハ桐野篠原ハも髣髴たれば川  
尻の本陣ハ石井郷の偽内裏あり東百官を  
大將少將大佐少佐あり是と以て相馬内裏  
の新帝亦ハ平親王と知る西國の兇徒も昔  
將門東國ハ威と振ふるハ今西國ハ隆盛逆意と  
振ふるハ朝敵顯然たる逆賊ハらんや





逆將新政  
 府の標札  
 と掲げ  
 る



新政府

鹿兒島暴徒を近來かこむと揮て進げき  
弾薬不缺乏するゆゑなり官軍此所に進  
撃したりけりか賊軍をこきと聞くより一  
軍をゆつと伏兵とる一軍の直は官軍と  
激戦し偽り敗して兵器を捨て散々の身  
と見せうけ敗走りたりけり官軍の得る  
と之に乗とて短兵急進撃為したるごと  
ろ豈圖らんや横合より一軍の伏勢突

然とて起りたち官軍と暫時激戦す因  
官軍一時利を失ひける午前九時より二時向  
をうり激戦ありかを一先づ双方とも引あげ  
たりしが暴徒へ素より銃器弾薬を始とめ  
とて糧食費用等みりるまゝ備具せざ  
るなり就中金銭の如きも於てなや僅う七  
八萬圓も過ぎたりとてへども原來彼の  
おみての管内の租税のともありて毎年大蔵省

よりしそ二十萬圓と該縣に廻されたりしあり  
 然るところ鹿兒島縣の士族等今年に何故  
 るのり家祿の受取方を取りとぎ既先般横  
 山一等屬が出京のり定規の如く金圓と大  
 藏省より受取濟ふなりと神戸まゝに携へ帰  
 らるゝりしと尚も同縣の喜入氏々大坂表  
 又登り来り種々金策のり六萬圓餘の金  
 貨と得るやの餘の金策へ同舊藩有馬藤

太ふ周旋方と依頼為し喜入氏へ横山一等  
 屬とどのり三國丸あり帰國の手筈と極め  
 たりしと政府にて早くもことと知り三國丸の出  
 帆と止め右兩人を拘留せりしと金員は皆取り  
 上げとあり又と企てて又關涉せりしものども何  
 れも神戸大坂と探索せりしと七八名捕縛不就き  
 しあるるり蓋し亦鹿兒島ふないて農工商  
 の中よりしと賊徒不組とたるもの數多之

何れける海と鹿兒島縣裁判所長の犬塚五  
 等判事と宮崎支廳詰りし居る鶴峯一  
 級判事と二月二十三日の夜長崎表へ着し  
 官へ上申すべき事ありとく神戸へ来たりし  
 と又と鹿兒島製造所へ出張せられたる佐々  
 木権大録々この不ど恙が無く帰京せられた  
 るよなん過日賊徒等が寄り集り製造所又  
 之れらの弾薬掠奪の際に至りては大に困難

と蒙りたりたる獨りまの佐々木氏にて是れ  
 ち弾薬の保護覚束なくとぞ見極めたるふ  
 よろき弾薬へ水と注れたるは是るん佐々木氏  
 の發論み出でたりも多ありける實に佐々木氏  
 性沉深寡殺みと頗る膽畧有り是とりん  
 て彼の地の各所ふ潜伏し賊徒の鹿兒島と  
 縁りつとすはる該地ふ居らると暴徒の景況と  
 探り窺がひ居る中ふ賊徒の出陣るせしその跡

みく身と全う一歸京せられたり又暴徒の兼く  
心ろ憎くやあひひけん今回軍事の血祭りみせ  
んとく遠近より教法弘道の為め諛縣ふ入  
り込こ一僧侶十三人と切り殺し生臭坊主の首  
級るれば神前ふ供しても聊り差問るゝるぞと  
己がまみく口ずささるるぐくよある血祭り團子の太  
きさよ杯勾言つて一同大音上みぞ笑ひけるとぞ亦  
西園邊の風説ふ久留米の市中に左の如く張札あ

るよ

此度の舉動は大義名分もるく私怨と暗さん  
為め疎暴了然たり天下の諸士方向と誤る  
勿れ以て忠告す

二月二十日

筑後義士

是より西郷隆盛川尻の本陣と押出一熊本鎮  
臺兵と吉次越二隊陣營兩進撃ありつる譯  
第三編ふ至り悉く記載さべし

二編下二二

十編まで引

西南太平記

西南太平記二編卷之下終

明治十年四月三日 御届  
全 十年四月十日 出版

編輯 東京府平民  
出版人 沼尻絰一郎  
第五大區一小區  
淺草茅町二丁目一番地

定價廿二錢五厘

發兌

大塚齋橋南久室寺町	同	東京日本橋通二丁目	同	同	同	同	同	同	同
伊丹屋善兵衛	北久室寺町	通三丁目	芝太神宮前	馬喰町二丁目	通油丁	大傳馬町三丁目	本石町三丁目	袋屋 龜次郎	挽屋 喜兵衛
河内屋源七郎	須原屋茂兵衛	山城屋佐兵衛	和泉屋市兵衛	山口屋藤兵衛	藤岡屋慶次郎				

書房

